綱　領
われわれJAYCEEは社会的・国家的・国際的な責任を自覚し志を同じうする者、相集い、力を合わせ青年としての英知と勇気と情熱をもって明るい豊かな社会を築き上げよう。

JCI 福島JCニュース
FUKUSHIMA JUNIOR CHAMBER OF COMMERCE
═福島青年会議所新聞═

福島青年会議所新聞
WEB版
Vol.510
発行責任者　後藤　洋孝
編集責任者　丹治　史博
発行日：2020年１月

2019年度　事業報告

第56代理事長　後藤　洋孝

■一年を振り返って

福島青年会議所が、明るい未来へ紡ぐべく、新たな地域の課題を見いだし、活動していくためには、これまでの活動を踏襲しつつ、今ある地域の課題に向き合い、持続可能な解決策を模索し、子ども達の希望、地域の誇りを紡ぐべく一年間活動してまいりました。

様々な事がありましたが、一つ一つ解決していくことにより、確実に組織としての力が高まったと確信しております。

■未来に紡ぐために

本年も13名の新しい仲間を迎える事ができました。福島青年会議所の未来を担う人財を迎えることができ嬉しく感じております。そして、本年はメンバーの家族が積極的に青年会議所の事業に参加してくれました。一番身近な市民に「ＪＣってかっこいいな」と思ってもらえたと感じております。もし、今年の体験をきっかけにメンバーの子供たちが、我々の運動を将来繋いでくれたら、これほど嬉しいことはありません。

■子ども達のために

本年も「信夫山」や「わらじまつり」など福島市のシンボル、文化を広く地域の子供たちへ発信いたしました。また、不自由な生活を体験することにより、今ある「あたりまえ」に感謝するこころを醸成できたこと嬉しく思います。なにより、多くのメンバー、OBの子供たちが我々の事業に参加し、郷土愛を醸成してくれたことを嬉しく思います。

無限の可能性をもった子ども達が未来の自分を見つけるため、未来に繋がる、「きっかけ」となる、機会を創出し、将来進むべき「せかい」を見いだす一助となる運動が展開できたことを誇りに思います。

■誇りを紡ぐために

わらじまつりが刷新され、ふくしまのまつりに対する我々の関わり方も大きく変化しました。大きな変化の渦の中、福島青年会議所がになった役割は非常に大きいものだったと思います。まさに、地域の人々を更に巻き込み、郷土に対する想いを今以上に醸成するために、伝統や格式、固定概念という壁を乗り越え、市民のための「おらがまちの祭り」として、次の世代、さらに次の世代へ脈々とこの誇りを伝承していけるような運動を展開できたと確信しております。

■地域の魅力を紡いでゆくために

今回、市民と共に事業を持続可能な課題解決策として更に地域へ浸透、定着させるべくパークランニング実行委員会を立ち上げる事が出来ました。

福島青年会議所が作り上げた、地域の問題解決策が市民の手により継続していく一歩を踏み出せたと感じております。

さらに、台風19号災害において、被災時の経験を活かし、行政や関係団体との連携、即時支援体制を整え、災害支援を行う事ができまし

た。災害が発生したことは残念ではありますが、我々が災害時に地域のために活動できる団体であるということを実証できたと確信いたしました。

■メンバーを紡ぎ、地域と繋ぐために

青年会議所メンバーが求めるニーズに対応し、資質を向上させる機会を創出、提供するべくトレンドを反映した講演、災害訓練など様々な例会を開催してまいりました。出欠の取り方の変更を行い例会の出席に関する意識変革も行いました。そして、それぞれをデータ化、見える化を行い、ニーズや課題を次へ伝える取り組みを行いました。本年が、愛すべき「福島」の課題解決のために一丸となって取り組める組織を構築する一助となったと確信しております。

■継続事業から持続事業へ

事業を青年会議所が求める持続可能な課題解決策とするために、課題解決策を市民へ落とし込み、市民自らの手によって維持、継続するための仕組みを構築する事ができました。

一部でありますが、事業内容を整備し、継続事業を市民の手による持続事業へ移行出来たと感じております。

■結びに

私は、福島青年会議所に入会してから７年という時間が過ぎました。近年は、入会歴 10 年以上の方が理事長を担われていた中で、歴が浅い私が理事長を全うできるのか、不安がありましたが、無事一年間全うすることができました。

本年は様々な事象がありましたが、「福島」に住める人々、福島青年会議所の未来へ紡ぐ運動を展開できたと確信しております。そして、私の想いが、次世代を担うメンバーに紡がれ、ふくしまの未来を担う組織へ成長することを切に願っております。

最後に 56 代理事長という重責を担うにあたり最後の最後までご支援いただきました、すべての皆様に心より感謝申し上げます。１年間、誠にありがとうございました。

紡げ!! 未来を!!

～今、私たちができることを～

事 務 局

事務局長 大和田 諒

2019年1月1日、後藤洋孝理事長が掲げるスローガン【紡げ!! 未来を!!】～今、私たちができることを～の基に、我々の活動が始まった。

【事務局とは？】
初めにJC＝青年会議所では、運動は理事長。運営は専務理事という言葉がある。
その中で事務局は運動と運営を噛み合わせる歯車と思っていただくと分かり易い。

【2019年度を総括】
イレギュラーが多かったという意見をよく聞くが、JC運営の中心である事務局にいた私はそうは思わない。
街の経済、景気、人の動き。
様々な状況を鑑みた際に今年のような動きが起こることは然るべきことだ。
この事象は来年以降も止まらないだろう。
イレギュラー＝悪いこと。では決してない。
イレギュラーは、時にムーブメントを起こす。
SDGsの広がりもそうだが、国立のピッチでわらじまつりが披露されること、福島市出身の古関さんの朝ドラが放映されることを数年前に全て予想していた人はおそらくいないだろう。
間違いなく【良い意味】でのイレギュラーが福島に活気を与え始めているのだ。

【事務局運営のポイント】
①一年間安定した出力を続けること
②先を予測したスケジュール管理、全体調整
③各種事業、遠征への参加
④徹底した時間管理
⑤真由美さん、次長・補佐への感謝

【最後に】
頂いていた【2019年を振り返って】というテーマに対する答えを書かせて頂き締めたいと思う。
⇒ただただ早かった。
※情野専務と1週間ぶりに会うだけで、凄く久しぶりに感じたことがこの1年を表していると思う。

それでは、皆さま一年間ありがとうございました。
また来年もよろしくお願い致します。

財 政 局

財政局長 佐藤 充孝

財政局は、ＬＯＭが事業面と財政面における健全性と公益性を保ちつつ、公益法人会計基準に基づいた適正な会計処理と各種運動を円滑に展開できるよう財政審査会議等を通して議案書等をチェックすることが主な任務となります。

今年度の財政審査会議には委員長にも出席していただき、会議の中で直接意見をやりとりさせていただきました。時には、担当副理事長、副委員長にも出席していただき、夜遅くまで修正点等の話し合いをしました。福島青年会議所の財源である会員の皆様からお預かりする貴重な運営費を適切に活用するためには、財政局が公正中立な立場で、適正な事業予算・事業計画かどうか、正確な事業決算書・報告書であるかの審査が必要です。その審査の上で、各委員会に資料を作成していただくことで、一貫した会計と透明性のある財政運営を行うことができます。そのため、非常に細かい指摘事項や時には議案書に大きな変更を加える必要がある指摘をし、特に委員長には大変苦労をかけたかと思います。しかし、皆様のご協力のおかげで、事業実施や予算執行に関して大きな問題もなく一年を終えることができました。
メンバーの皆様、とりわけ正副委員長の皆様のご協力に感謝申し上げて財政局の報告と致します。

ひとづくり会員拡大委員会

委員長　山際　喬紘

①第 32 回わんぱく相撲県北場所について

本事業が大きな怪我もなく終えられたのは良かったと考えるが、昨年よりも参加者が減少するという課題を残す結果となってしまった。また、県北相撲協会によって当日、急にプログラムが変更になったためタイムスケジュールで設営面での段取りの悪さにより当日応援に駆けつけてくれたメンバーにも多大な迷惑をかけてしまったことは大いに反省するべき点である。

今回から福島青年会議所主催、県北相撲協会の協力と住みわけをしっかりしたものの県北相撲協会が強くかかわっており、現実として福島青年会議所としては当日の設営の手伝い、チラシの配布しか携われていない事からメンバーの時間、会費を使ってまでわんぱく相撲事業を行う必要があるのか考えるべきではないかと感じた。

今後の参加推進方法としては、１つ例を挙げると昨年伊達市相撲振興協会で 100 人規模の子ども相撲大会が開催された実例があることから、次年度以降わんぱく相撲を盛り上げていくには、伊達市相撲振興協会主催の子ども相撲大会へ出向きわんぱく相撲参加の呼びかけ等を行うと共に福島青年会議所及び県北相撲協会がお互いを尊重しあい、大会の設営のあり方を見直し、県北相撲協会が行ったわんぱく相撲大会での各小学校の上位入賞者が福島 LOM 大会に参加しブロック大会、全国大会へと進むのが望ましいのではないかと考える。

②第 28 回わらしっ子～サマーキャンプ～

委員長として貴重な経験とたくさんの知識、仲間がいる大切さなど計り知れない成長をさせていただきました。今回の事業にお手伝いをいただいたメンバーの皆様、そして、事業計画から準備・当日まで事業に向き合って頂いた委員会メンバーに感謝します。事業が終わった後には、タイムスケジュール・シミュレーションの甘さや自己の力の無さと統率力の無さにまだまだ勉強不足だったと痛感させられました。しかしながら、参加をした子ども達には感謝の気持ちや日常生活には様々な人が関わっていることを感じながら、一生の思い出づくりができた事業であったと感じております。たくさんの子ども達が、郷土や家族・日常生活のありがたみを認識し、成長していって欲しいと切に願い、委員長の所見とさせて頂きます。

③出張わらじつくり体験教室

当初５校の予定が４校に減ってしまったことは大変残念に思いますが、次年度以降、告知方法や参加推進方法を見直すことでさらなる素晴らしい事業に発展していくことと確信します。今回、事業に参加された子ども達は真剣な表情でわらじの制作に取り組んでいました。また、完成したわらじを履いて大きな声で「わっしょい」と掛け声をかけながら小わらじを担ぐ様子を見て、福島を代表するまつりである「わらじまつり」を肌で感じ、わらじ文化をより深く体験できたものと思います。各小学校から感謝の手紙を頂戴し、この事業の素晴らしさを実感することが出来ましたし、学校側から毎年授業の一環として取り入れたいとの声もあり、地域にとっての必要性も感じることが出来ました。今回多くのメンバーに講師としてご協力頂き、事業を大成功に導くことが出来ました。ありがとうございました。

④ 2019 年 10 月例会

今回の例会は、ひとづくり会員拡大委員会での設営という事もあり、委員会の中には緊張や不安を持っていたメンバーがいた。16 時からと早い時間から会場を借りていたため、しっかりと予行練習や会場準備をすることが出来た。本番では緊張することなく例会に臨めた。また、高橋美博君によるセミナーにおいてはアンケート結果からメンバー全員から行動し続けることの大切さを理解していただくことが出来た。これからの人生、生きるための考え方や失敗を恐れず行動し続けることが出来るきっかけになったのではないかと思う。

私含め、委員会メンバーも設営担当ではあったが一緒にセミナーに参加することが出来た。私自身も自分を信じ迷わず強い意志、信念を持ち行動していこうと思う。

最後に今回セミナーで学んだことを青年会議所運動や地域、会社でリーダーシップを発揮していただくためにも「自分自身」を信じて日々、行動していただきたいと願い、私からの所見とさせていただきます。

１年間ひとづくり会員拡大委員会委員長として、貴重な経験と頼もしい仲間ができたことに感謝の気持ちでいっぱいです。また、当委員会の事業へ賛同いただきお手伝い頂きましたメンバーの皆様に心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。

まつり伝承会員拡大委員会

委員長　渡邉　裕太

本年度は、福島のために･･･やったる！」をスローガンに委員会を運営して参りました。

第７回暁まいり福男福女競走では、多くの会員メンバー、関係諸団体の皆様より多大なるご協力を頂きました。また、多くのメンバー、企業様、個人様よりご協賛を頂きました。感謝申し上げます。

今回は昼間の開催となり､最大のメリットとしては、大わらじの奉納風景を参加者に見てもらい暁まいりの由来などの説明をすることができました。また、多くの子供たちに参加してもらうことができました。デメリットとしては、昨年参加していただいた福島ユナイテッドＦＣや自衛隊の参加を募ることができなかった事や大わらじ奉納のスケジュールと重なってしまうために関係団体から協力も募ることができませんでした。今回昼間開催ということもあり予定参加者数に至るか不安でしたが、継続事業ということもあり、口コミやＳＮＳ等で公式アカウントの作成、ラジオによる事業ＰＲをさせていただいたこともあり過去最大となる 676 名の参加者を集めることができました。これにより、広報に予算をかけなくても十分に伝播力のある知名度の高い事業だということが実証できたと思います。そして、当日いわきのサンシャインマラソンが中止になったこともあり、多くの当日参加の申し込みをいただいたことから当日参加の枠も必要だと感じました。さらに、本年度も民放４社はもちろんＮＨＫやＮＣＶケーブルテレビ、ラジオ局でも事業の様子が放送され、ＮＣＶに関しては Youtube にてタイムリーに事業の様子がＵＰされました。テレビ局には特集まで組んでいただき昨年以上の放映時間だったことも本事業の話題性を象徴する結果となりました。また、わらじ文化に対して理解が「深まった・興味が出た」という方が９割に達し、本事業の目的が達成できたと感じています。

そして、今後の開催時間の選定についてはアンケートの結果、過半数の方が昼間開催のほうがいいと答えていますが、例年開催日が曜日に関係なく暁まいり当日２月 10 日のため、参加しやすい時間を考慮したうえで選定する必要があると思います。

継続事業として知名度、話題性ともに年々高まっている本事業ですが、予算、運営体制、運営規模など今後どのようなビジョンを持って移行していくのか、さらに、暁参り事態の参拝者をどう増やしていくのか等、しっかり次年度以降に引き継いでいきたいと思います。

第 50 回わらじまつりは 50 周年を期に新旧交代が行われ､今まで長く実施されてきたわらじ競走を終了し、新たにわらじ太鼓を創設しました。大幅なリニューアルの為、不備や後手を多く踏むこととなったことで、数多くのご迷惑をおかけしました。また、実行委員会との連携が必要不可欠であった為、計画段階での実施内容の詳細決定が遅れたことで、会員メンバーへの詳細な説明が事業実施直前までできませんでした。参加した太鼓演奏者のメンバーにも、練習日や場所の変更などでご迷惑をおかけしました。次年度以降には早期の計画立案をしてもらいたいです。

今後継続事業としてどのような形でわらじまつりに関わっていくか、本年度だけでは不確定な部分が多いですが、地域社会の健全な発達に関わる事業として、地域のわらじまつりに関わり文化を継承していくべく、事業参加者を増やしていけるような内容に精査し引き継ぎをしていきたいと思います。

わらじつくり体験教室においては今回も福島駅エスパルとウィズ本町の２会場にて開催させて頂きました。福島の玄関口である福島駅構内で開催できたことは､県内外の多くの方々にわらじまつりだけではなく、「わらじの文化」をより多く伝播できたと思います。次年度以降、さらに広い会場の検討やご協力頂けるメンバーを増やすことでより参加者を増やすことが可能だと感じました。

また、わらじまつりの会場において自分で作ったわらじを持ち歩いている方々を何名か見つけることができ、本事業がわらじまつりにおいてもプラスの価値を演出できていると実感しました。

１年を通して当委員会の全ての事業に賛同いただきお手伝い頂いたメンバーの皆様、関係諸団体の皆様に心から感謝を申し上げます。次年度もやったれ！やったる！

まちづくり会員拡大委員会

委員長　安部　守

本年度、まちづくり会員拡大委員会では、「紡げ!! 未来を!! ～今、私たちができることを～」のスローガンのもと１年間活動して参りました。

５月には、第７回信夫山パークランニングレースを開催し、全国各地より 1,300 名を超える方にご登録いただきました。今年の新たな試みとしては、初めて小学生の部を設置し、大人だけではなく子供達にも、信夫山の素晴らしさや福島市の魅力を伝えることができました。また、信夫山の観光資源を高めるために、桜の木の植樹や、レース参加者と共にツツジの植樹も行ないました。

８月には元号が令和に変わってから初となる福島とうろう流し花火大会を開催し、夏の風物詩である花火を打ち上げることで中心市街地の賑わいの演出ができたのではないかと思います。

２月には災害時支援相互協力協定を結んでいる福島市社会福祉協議会と水害を想定した図上訓練を開催しました。また５月には福島市総合防災訓練への参加をし、市社協との連携や災害を想定した訓練を行なうことができました。その結果、10 月に起きた台風 19 号による水害被害では、福島市社会福祉協議会と福島青年会議所の連携が協定を結んでから初めてだったにも関わらずスムーズに行なうことができました。今回の災害で思ったことは、災害が起きてからでは遅いこと、また、連携の重要性が分かりました。

最後に、１年を通して当委員会の事業にご協力をいただいた福島青年会議所メンバーの皆様、そして OB の皆様に感謝を申し上げ、すべての事業が滞りなく無事終了したことをご報告申し上げます。１年間本当にありがとうございました。

総務会員拡大委員会

委員長　丹治　史博

今年、例会の出席に関して、今までと評価方法を変えて運用してきましたが、忙しい中チェックに来てくださったメンバーの気持ちを無下にすることもなく、実際の参加に関しても評価に反映される今年の集計方法は、今までのチェックのみの方法に比較して、会のためになると考えます。この集計方法で高いスコアを目指していくには、例会の質を高める必要があり、結果メンバーの成長にもつながり、会の発展に結び付くと思います。力が及ばず私には新参加率で 100％の例会を実施することはできませんでしたが、次年度以降、達成していただけること、例会が会員にとってより有意義に開催されることを心から願っています。

多くの方々に助けていただき、１年間委員長職を全うすることができました。特に委員会メンバーの皆様には、委員長として至らない点多々ある中、１年間を通して支えていただき心から感謝しかございません。チームワークが強みの楽しい委員会でした。皆様のおかげで私にとってかけがえのない１年間になりました。関わったすべての方に深く感謝を申し上げます。１年間ありがとうございました。